

リオ+20の成果とその将来

世界中の人が注目する中で開催された「国連持続可能な開発会議（リオ+20）」の会議で、どのような成果があったのか？ アジア開発銀行、国連開発計画等の国際機関に勤務した経験を持ち、2002年のヨハネスブルグ・サミットでは当時の小泉純一郎首相率いる日本政府代表団の顧問団長、今回はメジャーグループの国内準備委員会委員を務めた廣野良吉先生にお話を伺いました。

そもそも、リオ+20の目的とは？

1990年代には、地球的課題を扱う大きな国際会議がいくつか開催されましたが、そのうちの一つが92年に開催された地球サミットです。国連の狙いは、環境と開発について各国政府にしっかりと考えてもらうこと、またステークホルダーにも一緒に考えてほしいので、市民も参加できる国連会議にしたのです。その10年後には、ご存知のようにヨハネスブルグ・サミットが開かれています。

地球サミットから20年経った今、この間に何が起こったのかをきちんと検証し、今後どう取り組んでいくべきか、各国政府に政治的決意を表明してもらうこと。それが、今回開催されたリオ+20の目的です。

その目的は達成されたのでしょうか？メディア等では、具体的な施策や数値目標が盛り込まれず、期待

外れというコメントが見受けられますが…。

今回について言えば、リオ+20準備委員会での討論から、20年前や10年前ほどの期待はできないと分かっています。主要テーマとなっていたグリーンエコノミーも、途上国からは先進国による一種の「グリーン植民地主義」ではないかという誤解を受ける等、認識の差もあり、数値目標を設定するための政府間合意は難しかった。

一方で評価できる点もあると思うのですが、いかがでしょうか？

見方はいろいろあると思いますが、ある程度進歩したという点では次の3点が挙げられます。

第一は、具体的施策や数値目標こそ盛り込めなかったものの、「20年前と比べ地球の生態系環境は悪化し、どこかで止めなければますます悪くなる」「貧困、紛争、雇用不安等、人間社会的課題についても解決しなければなら

るべきだ」とアピールしたこと。その結果、成果文書に「反省」が明記されました。もし、メジャーグループが強くアピールしなければ、この点は曖昧になったでしょう。

第二は、グループにより多少の違いはあるものの、メジャーグループは世



ジャパンバピリオンでブラジルの青年たちと一緒に
(写真提供:廣野良吉先生)

界一体だということです。つまり、国というものはそれぞれの立場がありますが、メジャーグループには先進国、途上国という壁がないのです。とにかく政府代表団に積極的に提言し、成果文書に反映させるような力を持つてきました。また、先進国では、政府がメジャーグループの意見を取り入れる傾向にあり、この気運はますます高まっていくでしょう。

第三は、多くのメジャーグループは国連の機能を強化したいと考えていることです。各国政府は「国連＝国益をかけて戦う場」と冷めた見方をしがちですが、メジャーグループは自分たちの意見を反映させるには国連の機能強化が必要と考えています。リオ+20でも、こうしたメジャーグループの提言

Commentary

ない」と再認識したこと。そして、これらの「生態系環境と人間社会的課題は相互に関係している」と皆が認めたことです。これは素直に評価して良いでしょう。

第二は、世界中から多くのステークホルダーが参加し、自分たちが望む未来を語り合ったことです。私も13日から22日まで現地に滞在し、ほぼ毎日のように様々な会合に参加し意見を述べました。実際に数えた訳ではないので正確には分かりませんが、至る所で会合が持たれていましたから、大小を合わせると、その数は1000余りになるのではないのでしょうか。とにかくすごいことだと思います。

そして第三に、SDGs（持続可能な開発目標）について方向性が見えたことです。これまではMDGs（ミレニアム開発目標）というものがありましたが、これはあくまでも途上国の貧困削減を目標とするものでした。しかし、SDGsは我々が直面し

が受け入れられ、具体的にはCSD（持続可能な開発委員会）に替わるハイレベル政治フォーラムの設置、そしてUNEP（国連環境計画）の機能強化について第67回国連総会で具体的内容を採択すると合意しています。

もちろん、成果文書に入らなかった提言も多くあります。主なものでは、再生可能エネルギー導入の目標値設定、原子力発電への依存度の引き下げ等がそうです。個人的に言えば、「地球上の資源は地球の所有物。みんなが共有する地球」というグローバル・コモンズの考え方を、成果文書に反映できなかったのは残念なことです。

最後に、今後の課題と日本に対する期待を教えてください。

リオ+20を理解するための基礎知識

■リオ+20の概要

2012年6月13～24日（本会議は20～22日）、191の国・地域から各国の首脳や政府代表団、NGO等、約3万人が参加した史上最大の国連会議。

【目的】

- ①持続可能な開発に関する新たな政治的コミットメントを確保する。
- ②持続可能な開発に関する主要なサミットの成果の実施における現在までの進展および残されたギャップを評価する。
- ③新しい、または出現しつつある課題を扱う。

【テーマ】

- ①持続可能な開発および貧困撲滅の文脈におけるグリーンエコノミー。
- ②持続可能な開発のための制度的枠組み。

■リオ+20までの道のり

1972年	国連人間環境会議（ストックホルム） 「人間環境宣言」採択
1992年	国連環境開発会議（通称地球サミット） 「リオ宣言」「アジェンダ21」「生物多様性条約」 「気候変動枠組み条約」「砂漠化対処条約」採択
1997年	地球温暖化防止京都会議（COP3） 「京都議定書」採択
2000年	国連ミレニアム・サミット 「国連ミレニアム宣言」採択

リオ+20

2002年	持続可能な開発に関する世界首脳会議 （ヨハネスブルグ・サミット）
2010年	生物多様性条約第10回締約国会議（COP10） 「名古屋議定書」採択
2012年	国連持続可能な開発会議（通称リオ+20）

■メジャーグループとは

1992年の地球サミットでは、21世紀に向けた行動計画「アジェンダ21」を採択したが、この中で広く市民社会の参加を促し、環境問題解決のための主要なプレイヤーとして、次の9つのグループを定義した。①女性、②子ども・若者、③先住民族、④非政府組織（NGO）、⑤地方自治体、⑥労働者・労働組合、⑦企業・産業、⑧科学技術コミュニティ、⑨農業者。これらをメジャーグループと言う。

■成果文書とは

正式タイトルを「The Future We Want（我々が望む未来）」と言い、2010年6月以降10回以上の準備会合を経て本会議で採択された。同文書は53ページ・6章・283パラグラフで構成されている。

- 1章 共通のビジョン
- 2章 新たな政治的コミットメント
- 3章 持続可能な開発と貧困撲滅の文脈におけるグリーン経済
- 4章 持続可能な開発のための制度的枠組み
- 5章 行動枠組みとフォローアップ
- 6章 実施手段

※成果文書はリオ+20の公式ホームページよりダウンロード可能。<http://www.uncsd2012.org/index.html>



一般社団法人
環境パートナーシップ会議
代表理事
廣野良吉 先生

ひろの・りょうきち
成蹊大学名誉教授。日本
評価学会・国際開発評価学
会副会長の他、国連大学
シニア・アドバイザー等、
多数の諮問委員を務める。

今回はステークホルダーの参加が多かったと評価されましたが、いわゆるメジャーグループの提言はどの程度反映されたのですか？

リオ+20で言うところ、やはり3つのことが言えます。

第一は、メジャーグループがそれぞれ自国政府に対し「するべきことをきちんとやってこなかった。きちんとや

正直言って、リオ+20に関しては、日本における市民社会の盛り上がりは少なかったと思います。本来なら、市民が積極的に議論に参加し、政府の背中を押すのが望ましい。そういう意味では、メジャーグループの力が弱かったかなと反省する面もあります。政府に対して大きな力を持つメジャーグループも出てきていますが、まだまだ力不足と認めなければなりません。

しかし、SDGsという方向性が決まった以上、日本政府に期待することもあります。今のところ、その内容は漠然としています。ぜひとも日本がイニシアティブを取り、新しい目標に向かって世界をリードしてほしい。日本には、それを可能にする豊かな経験があります。